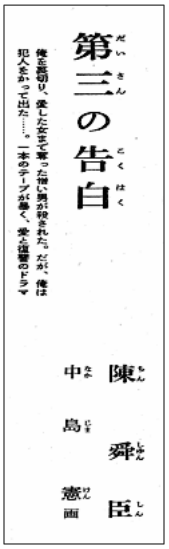
陳舜臣さんを語る会通信

NO.121　Jun.　2024

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2024年6月20日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

短編集未収録27作を順次紹介いたします/第5回4作、その1「第三の告白」

短編集未収録27作を順次、詳しく紹介しています。本号はその第５回です。前号に続き、初出年の古い順で４作取り上げました。　（編集委員　橘雄三）



「第三の告白」は『小説エース』一九六八年11月号掲載。カットが三つ入って二十ページの短編です。

舞台・作中時間、登場人物及びあらすじ

［舞台・作中時間］

舞台は東京と神戸です。冒頭、東京・杉並区で殺人事件が起きます。

月刊誌の一九六八年11月号掲載で、作中時間もその頃です。

［登場人物］

●倉井昌夫　53歳。東京・杉並区在住。新東産業社長。「閨房の睦言、セックスの歓喜の絶叫などのコレクター」。その録音テープの一本が犯人特定の決め手に。

●三宅淳造　34、35歳。五年前までは新東産業の経理課員。当時、専務だった倉井の指示で一億円近くを横領し、発覚。「一人で泥をかぶり」、一年半服役。出所後、神戸の港湾荷役会社に勤め、のち、同じ神戸で小さな運送店をはじめる。

●淀野節子　三宅より三歳年下。新東産業の子会社、日南商事の経理課員。

●竹原宏平　三宅より一歳年上。埼玉出身。神戸で現場労働者を含め従業員50人ほどの港湾荷役会社を経営。

●山口幸枝　節子の従姉。三宮のスタンド・バー「アイリス」のマダム。

［あらすじ］

冒頭、新東産業社長倉井昌夫が、杉並区の自宅の寝室でパジャマ姿のまま、死体で発見されます。警察は状況から他殺の線で捜査を始めます。

ところで、翌日の朝刊に事件が報道されると、三宅淳造という男が、「倉井昌夫を殺したのは私です」と名乗り出ます。

三宅は警察の取り調べに、延々と倉井に対する憎悪を述べます。

先ず、新東産業経理課時代の横領について話し、続いて、横領が発覚し、倉井に三千万を代償に「**一人で泥をかぶってくれ**」と頼まれてそれに応じたこと、実刑判決を受け一年半服役したこと、

出所して倉井を訪れると、「**出所早々、大金を手にしたことがわかれば、面倒なことになりかねない…。二年間、他所へ行って頑張ってくれ**」と言われ、出所祝の百万円だけもらって神戸へ行き、港湾荷役会社に職を見つけたこと、

更に二年たって、倉井に会うと、「**すまないがもう一年のばしてくれ**」と…。

こんなことが二度、三度と続いていたが、つぎの年に顔を出すと、「**きみ、そんな約束があったかね？言いがかりもいい加減にしたまえ**」。…。

私は一たんはあきらめて、神戸へかえりました。私は例の荷役会社をやめて、自分で小さいながらも運送店をはじめていたのです。私はなにもかも忘れて仕事にうちこもうと思いました。

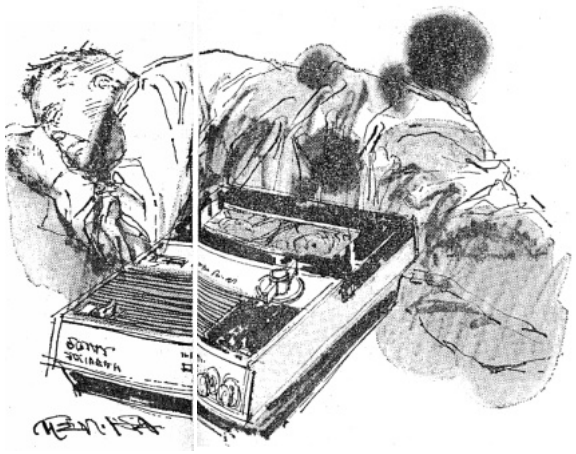
しかし、

倉井の卑劣なやり方が、いまさらのように、新しい怒りをこめて思いおこされるのです。

ところが、三宅について、確固たるアリバイがあきらかになり、三宅の陳述は、無駄になりました。では、誰がどんな動機でどのようにして倉井を…。

掲載誌のタイトル脇に、「**おれを裏切り、愛した女まで奪った憎い男が殺された。だが、俺は犯人をかって出た…。一本のテープが暴く、愛と復讐のドラマ**」とあります。※「俺」とは三宅淳造です。

三宅、淀野節子、そして竹原宏平、三人の関係はいかに…。ストーリーはヤマ場を迎えます。



死体の横にはテープレコーダーが

短編集未収録作品紹介/第5回4作、その2「美貌の波紋」

美貌の波紋

陳舜臣
杉全直画

「美貌の波紋」は『小説現代』の一九六九年4月号に掲載されました。挿し絵が二つ入って、十三ページの短編です。

舞台・作中時間、登場人物及びあらすじ

［舞台・作中時間］

六甲山麓の堀邸とその周辺。月刊誌の一九六九年4月号に掲載されました。作中時間もその頃です。

［登場人物］

●堀修策　75歳。Y電機社長として、長年、財界で重きをなしてきた。会長となって第一線を退いている。剣道五段で小太刀も使う。六甲山麓の邸に住む。同居していた三男が家族を伴いS商事ニューヨーク支店へ赴任したのが姪の久仁子を呼び寄せた理由。邸には、ほかに、住み込みの運転手夫婦とお手伝いさんが二人。

●堀久仁子　堀修策の姪。

「お手伝いさんになりきるんですよ。姪だからと、甘えた気もちをもってはいけません」と母親に言われ倉敷から堀家にやって来た。姪とはいえ、修策とは祖父と孫ほど歳の差が。

●有田康一　30歳前後。自称画家。長髪に無精ひげ、よれよれの上衣のあちこちに絵具のシミ。堀修策のY電機時代の同僚の息子。Y電機で大きな事故があった時、有田の父が堀を庇って引責辞職した。

●村上直樹　40代の半ばを越している。身なりの悪さは尋常でない。垢が服に染み付いている。戦時中、入隊した堀修策の息子の上官で、よくしてくれた。

●三原芳彦　兵庫県警の青年警部。堀修策の同僚の息子。堀修策の小太刀の弟子で、堀邸に出入りする。

［あらすじ］

有田と村上に接点はないが、どちらも、堀家訪問客の変り種だった。堀とは、ひょっこりやって来ては、永遠に交わりそうもない議論を延々と続けるような間柄。

そんな二人を堀は、

「三十にもなって、アカから脱け出せないなんて、有田君はまだ子どもだなあ。村上君は世をすねているだけさ」と、憐れむように言っていた。

久仁子は秘書役として、傍らで、堀修策の客との面談を記録していた。

ところで、

この二人の変り種が、しだいにその舌鋒をするどくしてきたのは、どうやら私が堀邸にはいってからのようである。…。彼らが先鋭化した理由を、私は知っている。私のせいである。うぬぼれと思われるかもしれないが、二人の男は私を意識していたのだ。私にいいところを見せたいために、彼らは背伸びをはじめたのにちがいない。

そんな時、有田と村上が、ほぼ同じ時間に殺されるという事件が起きる。

久仁子の美貌がまわりの男性の心に波紋を生じ、それが事件の引き金になったのだ。

久仁子は、そのことに気づいていた。しかし、その波紋が、あろうことか、75歳の堀修策にまで及んでいたとは…。挿し絵はその場面。

短編集未収録作品紹介/第5回4作、その3「浮いた手紙」

推理小説

浮いた手紙

陳舜臣

白根光夫画

「浮いた手紙」は『小説サンデー毎日』の一九七〇年6月号に掲載されました。挿し絵が四つ入って、二十一ページの短編です。

舞台・作中時間、登場人物及びあらすじ

[舞台・作中時間]

舞台は神戸。掲載誌の発行が一九七〇年6月なので、作中時間もその頃か。こんな記述も。

私はノートの表紙を見た。そこには1967と書かれていた。「それが一ばん新しい。去年のも、一昨年のもみつからなかった」

[登場人物]

●塚本春子　55歳、未婚。アメリカ帰りの二世。ハルコ・ツカモトのほうがぴったりする。金融業者として大きな金額を動かしていたよう。神戸市山本通にある、戦災に焼け残った階上一軒、階下一軒のふるい建物の二階に住む。この建物、階上と階下は別階段で独立した形になっている。

●私　妻と子供二人の四人家族。戦時中、塚本春子は中学生の「私」の英会話の先生だった。以来、二人は親しくしてきた。一年前、マンション購入時に彼女から借りた五十万円が、まだ三十万円残っている。

●牧野淳吉　60年配。塚本春子と同じ建物の一階に住む。妻と会社員の息子の三人暮らし。

●大内浩平　塚本春子宅の近所に住む同業者。

●赤毛の男　塚本春子殺害事件の数日前から、付近住民数人に目撃された不審人物。

●フレデリック・バーンズ　七十歳すぎ。生田警察署近くのビルに事務所を置くバーンズ商会の社長。日本生まれの英国人、戦前に帰化。名刺には山崎芭杏と刷る。北村春子の日記にもしばしば登場するほどの親しい仲。事件解明の重要な情報を提供する。

●安岡　兵庫県警の警部。「私」の友人。

[あらすじ]

冒頭、塚本春子が神戸・山本通の自宅でジャック・ナイフで胸を刺され殺される。

兵庫県警は、金融関係と痴情関係の両面から捜査を始める。ハルコから借金のある「私」、ハルコの階下に住む牧野、近所の同業者大内らも参考人として事情聴取を受ける。

特に、牧野、大内の証言から、不審人物として、「赤毛の男」が浮び上がる。

県警の警部・安岡は「私」に一枚の紙片を差し出した。ハルコの、タイプで打った手紙であった。「**あかるいブルーブラックの活字が行儀よくならんでい**」たが、内容は、恐喝であった。宛名はなかったが、文面から、アメリカ在住の人物宛とわかった。

警察は、宛先のアメリカ在住の人物が代理人を日本へ寄越すと先読みし、「赤毛の男」と結びつけた。このことは犯人の思うつぼであった。

フレデリック・バーンズの、タイプライターのリボンの色に関する情報で、問題の手紙がハルコの打ったものでないことが判明。捜査は進展する。

犯人はハルコに約二千万円の借金があった。**金を借りたくせに、ハルコが自分を苦しめていることに腹を立てたのだ。二千万円という金の問題よりも、そんな憎悪のほうが、動機としては強かったのかもしれない。**

犯人はそんな動機から、複雑な殺人ストーリーを考え実行したのだ。

先ず一つは、ハルコが書いたとする恐喝の手紙の偽造。

これは、リボンの色から破綻した。

二つ目は、ストーリーに信憑性を持たせるための登場人物「赤毛の男」だったが…。

これは、赤毛の鬘をつけた犯人自身であったことが判明した。

短編集未収録作品紹介/第5回4作、その4「居候坊主 上下」

「居候坊主 上」は『週刊言論』の一九七一年1月22日号に、「同 下」は29日号に掲載されました。上下併せて、挿絵が六つ入って十一ページの短編です。

時代背景・舞台、登場人物及びネタバレ

明の太祖朱元璋

［時代背景・舞台］

中国は明の太祖朱元璋の時代、洪武十年（一三七七）ごろ。日本は南北朝時代。舞台は寧波、一部、日本の博多。

明の太祖朱元璋の画像はいくつも残っているがどれも、顎が突き出ていて下唇が厚い。中にはひどいあばた面もある。ここに挙げたものは南京にある朱元璋の陵墓、明孝陵にあったものなので、一応、公式のものといえる（編集委員撮影）。いい男っぷりである。

朱元璋は、乞食坊主として、各地を放浪するような微賤から身を起こして、たぐいまれな幸運と、とぎすまされたするどいカンと、逞しく敏捷な行動力とによって天下を取った。前半生に屈辱をなめていただけに、権力に対する執着は異常に強く、猜疑心もまた、強かった。

［登場人物］

●昭海　三十五、六歳、日本人僧。寧波の天弘寺の僧侶、といっても正式の寺僧ではなく、いわば〝居候坊主〟。留学僧の学成らなかったケースで、**いまでは、仏典を学ぶよりも、北九州から渡って来る日本商人の通訳をつとめたり、彼らの商売上のトラブルの調停をすることに熱心であった。康雲禅師の厚意に甘んじている。**

●康雲禅師　天弘寺住職。

●林賢　衛指揮。明州（寧波の古名）の海防を担う司令官。『異域狂』。康雲禅師の友人。

●朱元璋　明の太祖。

●劉基　明初の名臣。その伝記に「性、剛にして、悪をにくむ」とあるから無類の正義派だったと思われる。胡惟庸に毒殺される？

●胡惟庸　丞相。劉基など、自身に反対する一派を徹底して弾圧して専横を極めたため、やがて洪武帝からその存在を疎まれるようになる。また劉基が病死すると、胡惟庸による毒殺ではという疑惑が起き、猜疑心の強い洪武帝は胡惟庸に一層、不信感を募らせた。←「胡惟庸の獄」

●陳寧　胡惟庸の取り巻きの一人。

●さつき　博多の遊里の女。林賢に落籍される。

［ネタバレ］

ところで、天弘寺の〝居候坊主〟昭海であるが、自分が寺に居られるのは、住職・康雲禅師の厚意と思いこんでいた。ところが、康雲禅師はそんな甘い人物ではなかった。皇帝の腹心だったのだ。親切にされていると思っていたらよいように利用されていたのだ。

皇帝と康雲禅師のやりとり。

「ほう、その居候坊主とやら、かなり事情を知っておるのではあるまいかな？」

「すこしは察したかもしれませぬ」

「そりゃ、ちと困ったな」

「ご案じ遊ばすな。その居候坊主が雲南まで無事行き着けないように、細工をしておりますれば…」

昭海は気の毒なことになるが、同じ運命が康雲禅師の身の上にも。皇帝は更に一枚も二枚も上手だった。

林賢とともに中国に渡った遊女さつき